長門一宮住吉神社本殿の建築年代とその特質

THE BUILT AGE AND CHARACTERISTIC OF NAGATO SUMIYOSHI SHRINE

中村 泰朗*

Yasuo NAKAMURA

Nagato Sumiyoshi is one of important shrines in the history of Japanese architecture. It is said that it was built in 1370, in the registration of the Agency for Cultural Affairs. But, as a result of considering the old documents and ornamental details, especially flog legs, I guess that it was rebuilt in 1578. And it has a lot of unique design, for example uchinori-nageshi which is used on pillars of eave.

Keywords : Shrine, Construction age, Local style, Detail designs, Flog legs, Uchinori-nageshi

神社, 建築年代, 地方色, 細部意匠, 本臺股, 内法長押

一、はじめに

長門一宮住吉神社は山口県下関市に鎮座する有力神社である。当社の本殿は九間社流造で屋根に五つの千鳥破風を配した長大かつ秀麗な中世神社本殿として明治三十六年に特別保護建造物（後に旧国宝）指定を受け、文化財保護法制定後の昭和二十八年に改めて国宝に指定されている。しかし当本殿に関する研究はあまり進んでおらず、わずかに概説的なものがあるに過ぎない。そこで本稿は細部意匠ならびに古文書を検討して建築年代を再考するとともに、当本殿の建築的特質を明らかにすることを目的とする。

当本殿に関する先行研究はまず土田充義氏によるものが挙げられる¹⁾。土田氏は当社の来歴や当本殿の規模形式を紹介し、流造と千鳥破風を組み合わせて連棟春日造本殿まがいの外観を持つ遺構として、当本殿は永徳三年（1383）の添御県坐神社本殿（奈良県）とならび年代的に最も古い例であること、庇部分に用いられる内法長押が他の本殿に見られない意匠であることを述べている。また当本殿は神座側面に戸口を開いている点など内部にも特異性を見出すことができ、現形式の成立時期や前身本殿の実証的研究は神社建築史上でかなり問題になると述べている。この他には稲垣榮三氏が屋根に千鳥破風を冠する連棟本殿の代表として当本殿を紹介している²⁾。稲垣氏は千鳥破風を持つ本殿で現存最古例は正平十八年（1363）の錦織神社本殿（大阪府）で³⁾、これに引き続き十四世紀後半頃に大阪南部から山陽道にかけて多くの事例を残していること、全ての例には当てはまらないものの、一つの千鳥破風が一つの神座を象徴していることを述べている。

二、住吉神社本殿の沿革と概要

（一）本殿の概要

まずは簡単に当本殿の規模形式を述べておく（図 1～5）。当本殿

は九間社流造であり、方一間の神座（内陣）五室を相の間四室で連結した身舎の前面に、庇（向拝）を九間連続で付した形式である。身舎の正側面に廻縁を設け、神座の前にのみ木階を降ろす。庇柱より外側に浜縁を、庇柱より内側を長押一段分高くして浜床とする。身舎は円柱、平三斗を用い、神座正面柱間のみに本臺股を入れる。庇では面取角柱、出三斗を用い、九間全てに中備として本臺股を入れる。また庇では九間連続して内法長押が打たれている。屋根は檜皮葺で、神座の上に千鳥破風が都合五箇所置かれている。なお現在の祭神は西（向かって左）から順に第一殿・住吉三神、第二殿・応神天皇、第三殿・武内宿祢命、第四殿・神功皇后、第五殿・建御名方命とする。

（二）住吉神社の沿革

当社の創建は伝説によると神功皇后の三韓征伐まで遡るといわれているが、確実な歴史書に見えるようになるのは平安時代になってからである。『三代実録』によると貞観元年（859）正月に当社の神階が従五位下から従五位上に進められ、その後貞観十七年に従四位上、仁和二年（886）に正四位下、『日本紀略』にも寛平三年（891）に正四位下から位一位を増進されたことが記されている。延長五年（927）にまとめられた『延喜式』の神名帳に名神大社として記載されており、当社は少なくとも十世紀には朝廷から崇敬された有力大社へと成長していたことが分かる。

平安時代末期になると、当社は長門一宮として認知されるようになる。中世一宮制の成立は全国的には十一世紀末から十二世紀初頭と見られているが、当社の一宮としての初見は『永昌記』⁴⁾の嘉承二年（1107）四月二十八日条である。ここには長門一宮神宮寺の別当僧侶が神祇官の移に移らないとの申文が出されたことが見えており、少なくとも嘉承二年には長門一宮として確立していたと考えられる。

本稿の内容の一部は、中村泰朗「長門一宮住吉神社本殿の建築年代の再考」(日本建築学会大会学術講演梗概集(東海)2012)で発表している。

* 広島大学大学院文学研究科 大学院生

Graduate Student, Graduate School of Letters, Hiroshima Univ.

图 1 住吉神社本殿平面图

图 2 住吉神社本殿正面图

图 3 住吉神社本殿侧面图

图 4 住吉神社本殿梁間断面图

图 5 住吉神社本殿桁行断面图

（三）本殿の沿革

建武三年（1336）の「長門国一宮大宮司貞近等申状写」⁵⁾には、正応年間（1288～92）に遷宮をした後に神殿が破壊され、文保年間（1317～19）に日野大納言が国司であった時に仮殿を造り、嘉暦元年（1326）に仮殿遷宮まで行われ、正殿造営の沙汰を得るために国方より奏聞したり武家より目代に触れられたりしたが、仮殿のまま数年を送り、神体神宝が雨露に侵されてしまった。先々の目代等の請文に任せ、正税で造営を遂げられないのであれば、料足（造営料）を社家に寄せて造営を遂げるのかどうか沙汰を経られることを望むことが述べられている。当社の本殿の造営が滞った原因は、戦乱により在地領主が自立性を強め、国衙の命令に従わなくなり造営費用の調達や神事・祭料の確保が難しくなっていたこと、神社の社領を在地領主が押領したことなどが考えられる。十四世紀の長門国は南北朝の動乱に加え、厚東氏と豊田氏による覇権争い、さらに大内氏の侵攻によって戦乱続きであった。このような中で当社の正殿造営費用が集まったとも思えず、その後の応安三年（1370）再建時までの当社には正殿はなく仮殿があるのみだったと考えられる。

周防国の支配者であった大内弘世は、応安三年に長門国を制したことを記念して当社を再建し祭礼を行っている。この時に彼が奉納した願文「大内弘世道階願文案」⁶⁾には、

所謂九間一面宝殿并三間申殿、相励新造、至御供所横廻廊者、
先構仮屋、沽洗中瀬候遷宮既畢

とあり、九間一面の宝殿（本殿）と三間の申殿を新造し、御供所、横殿、廻廊は仮屋を建てて遷宮を行ったことが記されている。大内氏の厚い保護を受けた後、当社は毛利氏の支配下に置かれるようになる。江戸時代には長府毛利氏により社殿の修理を受け、安永四年（1775）、文化十三年（1816）、嘉永三年（1850）、文久二年（1862）に本殿の上葺が行われている⁷⁾。その後明治四年に国幣小社に列せられ、同四十四年に官幣中社に昇格している。

三、建築年代の再考

（一）文献の再検討

文化庁の登録では、当本殿の建築年代は「長門国守護職次第」⁸⁾によって応安三年とされている。同文書には「卅代大内介殿弘世御法名道階（中略）同御代社頭皆造御遷宮。応安三年三月十一日御出仕有之。」とあり、また前掲の応安三年の「大内弘世道階願文案」には、この時建てられた本殿が「九間一面」すなわち現状と同じ平面形式であることが記されている。さらに後述するように当本殿の細部意匠が正しく年代判定されていないこともあって、一部の本臺股が取り替えられてはいるものの⁹⁾、応安三年の部材がほぼ残っていると考えられており、当本殿の建築年代について疑問を持つ研究者はいなかった。しかし本臺股の意匠を見ると当本殿の建築年代は到底納得できるものではない。そこで古記録ならびに本臺股の意匠によって当本殿の建築年代を再考していきたい。

当本殿の建築年代を考えるうえで注目できるのが応永三十三年（1426）の「長門国一宮御簾日記案」（以下「御簾日記」）¹⁰⁾である。ここには当社に用いる御簾の注文が記されており、

案

一宮御簾日記

内御簾

長一丈一尺五寸 弘同之、

外御簾

長一丈五尺 弘一丈一尺五寸、

右此前、一社別二枚アテタルへく候、委細大宮司方申談、令注進之候、

応永卅三九月廿七日

周音 在判

中村殿

宮殿金物ハ何も結構候之間、目出候

とあって、内御簾は長さ、幅ともに一丈一尺五寸、外御簾は長さ一丈五尺、幅一丈一尺五寸であったことが分かる。

この内御簾・外御簾についてだが、当時の長門国主大内義興が当社の各祭神に奉納した神宝を記した記録である大永六年（1526）の「長門国一宮御神宝物調進送文案」¹¹⁾を見ると、

貢上

御斎籠御神宝物調進送文事

合

一宮住吉大明神御料

（中略）

御簾三枚内

内一枚錦額向
外二枚絹額向

荒魂御料

（中略）

御簾三枚内

内一枚錦額向
外二枚絹額向

御蔭御料

（中略）

御簾三枚内

内一枚錦額向
外二枚絹額向

妹母宮御料

（中略）

御簾三枚内

内一枚錦額向
外二枚絹額向

武者殿御料

（中略）

御簾二枚内

内一枚錦額向
外一枚絹額向

とあり、当本殿では神宝として内御簾、外御簾が調進されていたことが分かる。また第一神（一宮住吉大明神）から第四神（妹母宮）までは内御簾を一枚、外御簾を二枚とし、第五神（武者殿）のみは内・外御簾ともに一枚ずつ献じたことが記されており、内御簾は計五枚で現本殿の神座の前すなわち身舎扉の戸口数と、外御簾は計九枚で現本殿の庇の正面柱間と一致する。よって大永六年当時の本殿の平面形式は九間一面であり、内御簾は身舎扉の戸口に、外御簾は庇の正面に掛けた可能性が高いといえる。そして当本殿は遅くとも応安三年の時点で既に九間一面の平面形式をもち、大永六年の時点ならびに現状でも平面形式に変化がないことから、応永三十三年当時の本殿の平面形式も九間一面であったとしてよい。さらに一般的な神社本殿の例の通りに内御簾を祭壇の前、外御簾を身舎扉の戸口に掛けたとすると、身舎の内法高が一丈五尺ほどになってしまい、神社本殿にしては異様なほど高くなる。以上のことから応永三十三年当時も内御簾は身舎扉の戸口に、外御簾は庇の正面に掛けたと判断できる。

次に現本殿と御簾の大きさを比較検討してみたい。現本殿は神座正面が柱々々で八尺五分¹²⁾、身舎内法長押下端から床までが五尺五寸六分、庇内法長押下端から床までが六尺三寸五分である。御簾は

柱と柱の内側に掛けるため、御簾の幅は少なくとも神座正面の柱間寸法より短くてはならない。しかし「御簾日記」に記載された御簾の幅は内御簾・外御簾ともに一丈一尺五寸で、現本殿の神座正面の柱間寸法より1.4倍ほど長く、これでは御簾を掛けることは不可能である。また御簾は余分に長く作って床に垂らして曲げておくような用い方はせず、その長さは内法高とほぼ同等となる。よって「御簾日記」に記された御簾の長さは、応永三十三年時の本殿の内法高とほぼ同等の値であるといえる。そこで御簾の長さと同本殿の内法高を比較すると、内御簾は現本殿の身舎内法高のおよそ2倍、外御簾は庇内法高のおよそ2.3倍となることが分かる。

以上より応永三十三年当時の本殿は現状を比べると、九間一面という平面形式こそ等しいものの、平面では神座正面の柱間がおおよそ1.4倍、内法高に至ってはおよそ2倍以上であり、大きさが全く合わないことは明らかである。よって当社の本殿が応永三十三年以降に造替もしくは滅失によって再建されたことは確実であろう。

(二) 本殿の修理の経緯

次に応安造営以後の当本殿の修理の経緯を見ていくと、まず永享九年(1437)の「大内氏奉行人連署書状案」¹³⁾や同年の「鷲頭弘忠書状案」¹⁴⁾などには屋根上葺のための檜皮や竹釘に関する記述が見え、同十一年の「長門国一宮遷宮入目注文案」¹⁵⁾によって同年に上葺が終了して遷宮が行われたことが分かる。享祿四年(1531)の「大内氏奉行人連署奉書」¹⁶⁾には、

当社領段銭事、去年以来被拘置、被致愁訴候、社家及大破候之間、御造當事、至京都可有御進進之由候、御宝殿上葺事者、入目可為参百五拾六貫百五拾文之由、檜皮大工注申候

とあり、本殿を造営し、屋根に檜皮を葺くために必要な段銭について注進したことが記されている。また天文四年(1535)の「後奈良天皇綸旨」¹⁷⁾にも当社の造営に関する記述が見られる。当本殿神座内の天正五年(1577)の墨書¹⁸⁾によると「宮社御再興之砌五社御本地垂迹跡共如往昔書畢」とあって、当本殿を再興した際に本殿内部の壁面に、本地仏と垂迹神を往昔の如く書き終わったことが述べられており、同六年の「毛利輝元書状」¹⁹⁾を見ると同年四月十日に上葺が終了して遷宮が行われたことが分かる。

以上より当本殿は応安造営以後、永享十一年、享祿四年頃、天文四年、天正六年の四回ほど修理が行われたことが分かる。永享十一年の修理は、竹釘や檜皮の注文に関する記録が多く残ることから屋根の葺き替えが行われたことは明らかである。次に享祿四年頃の修理は「大内氏奉行人連署奉書」に見える三百五十六貫百五十文という金額から、屋根の葺き替えは行われたものの、本殿全体の造替といった大規模な工事が行われた可能性は低いと思われる。また天文四年の修理に関しては享祿四年頃の修理からそれほど時間も経過していないことから、小規模な工事であったことが予想される。最後の天正六年の修理については本殿内の墨書に「再興」と記されているのが注目される。再興という語には一般的に建て直すという意味か大修理を施すという意味がある。これまでの修理が屋根の葺き替えのみを行う比較的小規模な工事であったこと、応永三十三年以降に本殿が再建されたはずであることを考えれば、ここでの再興の意味は前者の意味であり、当本殿の再建年代も天正六年の可能性が高いと考えられる。

(三) 本墓股の意匠

最後に本墓股の意匠を検討することで、先ほど述べた当本殿の再建年代を確認したい。まず近畿地方の本墓股をみると、脚部は時代が下降するにつれて足首と上部の太さが均等になる。肩の繰形において、十四世紀では斗尻から数えて一筆目に対して二筆目がかなり小さかったのが、十五世紀以降になると二筆目の発達に伴って一筆目と二筆目の大きさがほぼ等しくなる。また十四世紀は二筆目が水平に少しだけ出て急に下っていくが、十五世紀以降になるとなだらかに下りようになる。また足元は徐々に大きくなる傾向をもつ。内繰の曲線で、斗の下にあたる部分は十四世紀のものは一筆が多く、二筆の場合は一筆目がかなり長い。十五世紀のものは二筆が一般化するが一筆目が次第に短くなる。しかし十五世紀までのものが茨を除いて一筆目と二筆目はほぼ直線的であるのに対し、十六世紀後期になると一筆目が短くなって二筆目と同じくらいになり、二筆目を大きく盛り上げるようになる。以上のことは正平十二年(1357)の長保寺多宝塔(和歌山県)の本墓股(図6)、文明四年(1472)の円成寺本堂厨子(奈良県)の本墓股(図7)、永祿二年(1559)三郷八幡神社本殿(和歌山県)の本墓股(図8)を比較すると分かるだろう。

図6 長保寺多宝塔本墓股

図7 円成寺本堂厨子本墓股

図8 三郷八幡神社本殿本墓股

次に山口県の本墓股を検討してみたい。まず室町中期とされている平清水八幡宮本殿(山口市)の本墓股(図9)をみると、肩の繰線は斗から数えて二筆目が小さく水平に出て急に降っており、内繰の繰線も一筆目、二筆目ともにほぼ水平であるが、二筆目が一筆目より長い。平清水八幡宮本殿の本墓股と中央の例を比べると、肩の繰形は十四世紀の特徴と一致するが、内側の繰形は十五世紀のものに近い。したがって平清水八幡宮本殿の例は十五世紀のものだと判断される。細部意匠の一部に古式が残るのは、山口県が中央と離れた地方にあるためと考えられる。永正十七年(1520)の八坂神社本殿(山口市)の本墓股(図10)では、肩の二筆目がやや大きくなって

おり、内線の曲線は下方に向けて円弧を二つ連ね三筆目を上方に大きく突き出した円弧とする。斗の下の方の曲線を中央の例のように反転曲線とせず円弧を二つ連ねるのは、室町後期以降の山口県の本墓股の特色と考えられ、この他に関伽井坊多宝塔（下松市）、古熊神社本殿（山口市）などに用いられている。

図9 平清水八幡宮本殿本墓股

図10 八坂神社本殿本墓股

ここで当本殿の身舎ならびに庇中央間以外の本墓股（図11、12）をみると、八坂神社本殿のものとは比べて内線の曲線の二筆目がさらに大きく盛り上がっていることが分かる。このことにより少なくとも永正年間より後の作成と考えられる。さらに肩の二筆目が大きく滑らかに下っている点、足元が極めて大きい点を加味すれば当本殿のものは永正より年代が下降し十六世紀中期以降の意匠を持つといえるだろう。

図11 住吉神社本殿身舎本墓股

図12 住吉神社本殿庇中央間以外本墓股

最後に庇中央間の本墓股（図13）についてだが、土田氏は、「この墓股は他の八個の墓股と形式がやや異なり、両脚が下方になるにしたがって細くなり、肩が強調され、室町時代末期の特徴を示している。そのことから、この墓股は弘治三年以降の毛利元就の繁栄の時期に、毛利氏が本殿等の修理を行い、その際に応安造営の墓股と取替えたものと推定される」²⁰⁾としている。両脚が下方になるにしたがって細くなるという指摘は当を得ていないが、足元が大きくなっている点や内線の曲線の特徴などをみると十五世紀の特徴を持つ

ている。したがって、これ以外の本墓股よりかえって古式ではあるが、内部彫刻に三星一引の毛利氏の家紋が加えられていることから、弘治三年（1555）の毛利元就の覇権成立時から天正六年までの間に元就あるいは隆元、輝元によって取り替えられた可能性も否定できない。

図13 住吉神社本殿庇中央間本墓股

以上より当本殿の本墓股は、身舎のものならびに庇中央間以外のものが十六世紀中期以降の意匠をもち、庇中央間のものに関しては毛利氏による取り替え材の可能性が高い。よって本墓股から推定できる当本殿の再建年代は十六世紀中期以降と考えられる。そこで先ほど述べたことと合わせて考えれば、当本殿の再建年代は天正六年と判断できる。

四、現本殿の特異な形式

（一）古式な形式

ここからは当社の本殿の特異な形式について考察を行う。以降、応安造営の本殿を前身本殿、天正再建の本殿を現本殿と呼称することとする。現本殿の特徴として古式な形式を持つことが挙げられる。

（イ）組物

現本殿の身舎組物は平三斗を用いており、妻虹梁は身舎正面柱上の平三斗の巻斗に組み込まれ、平三斗上の軒桁を固定する役割も兼ねている。柱上の大斗の上に梁間方向に内側に肘木が出され、この上に巻斗を置くことで虹梁を受け、肘木の外端は鯖の尾として突出させる（図3）。このような形式は平安末期の宇治上神社本殿の右殿の庇に既に用いられており、仁治二年（1241）の姿を伝えているといわれる厳島神社本殿では正面庇の両端のみ現本殿と同様の形式を持っている²¹⁾。

現本殿に用いられている鯖の尾付き平三斗の形式が平安時代末期には成立していたのに対し、身舎に出三斗を応用する形式は十五世紀頃になって流行する。早い例では永徳三年の添御県坐神社本殿があるものの、応永十年（1403）の八幡神社本殿（兵庫県宝塚市）、同二十年の広八幡神社本殿（和歌山県）など、出三斗を身舎に用いた例が十五世紀以降に増えている。以上より現本殿に用いられている組物の形式は、天正六年再建ながら古式を踏襲しているといえる。

（ロ）軒

この他に古式な形式として正面の垂木が挙げられる。現本殿では身舎の飛檐垂木を打ち越して庇の地垂木とし、さらに庇にて飛檐垂木を打って二軒繁垂木とする（図4）。三間社流造で最も古制を伝えているといわれる上下賀茂神社本殿では、正面垂木は身舎を地垂木と飛檐垂木の二軒繁垂木とし、この飛檐垂木上に打越垂木を打って

庇を一軒疎垂木とする。その後鎌倉時代後期とされる宇治神社本殿（京都府）に始まり、中世を通じて多くの本殿で現本殿と同様の形式が用いられている。三浦正幸氏によると現本殿のような垂木の用い方は鎌倉時代後期にはすでに出現し、流造の一般的形式になったとしている²²⁾。次に身舎の地垂木を庇へ打ち越し、庇のみを二軒とした形式が生まれている。早い例としては応永三十四年（1427）の伊予一宮大山祇神社本殿があり、その後十六世紀初期あたりから多く用いられるようになっていく。

上下賀茂神社などを見れば分かるように諸国一宮などの社格の高い神社では古式な形式が遵守されており、現本殿も長門一宮としての社格の高さから古式な形式を持っていると考えられる。また山口県では室町中期の平清水八幡宮本殿、文亀三年（1503）の今八幡宮本殿でも、現本殿と同様に身舎に平三斗を用い梁方向にも肘木を加えて外端を鯖の尾とする形式を持っている。三浦氏は中世の山口県は中央とは異なる独自の建築文化を持っていたことを述べているが²³⁾、現本殿などに用いられる古式な形式は、長門国という地方ゆえに時代の好みに後れが見られるということが指摘できる。

以上述べてきたとおり現本殿には天正六年再建にしては古式な構造形式が踏襲されている。しかし構造形式自体は古式であるが、本臺股の曲線や肘木の曲線といった細部意匠には時代の好みが見えやすく、現本殿の本臺股には十六世紀中期以降の好みが明確に現れている。また前述の古記録の検討からも現本殿の建築年代は天正六年とするのが妥当であろう。

（二）連三斗下の持送り

現本殿では身舎、庇の両端の組物に連三斗を用いている。一般的な連三斗では最下部の木鼻や肘木の下には何も入れることはないが、現本殿では身舎・庇ともに実肘木型の持送りを用いている（図14）。現本殿の身舎では神座の頭貫の上にのみ台輪を置いており、連三斗の大斗はこの台輪の上に置かれている。このため一般的な連三斗のように頭貫の位置で下段肘木を形成すると、大斗と下段肘木の先端の斗の位置が合わなくなり不都合が生じてしまう。それ故に現本殿身舎では下段肘木を台輪の上端に合わせて挿すようにして大斗と先端の斗の高さのずれを解消している。そして下段肘木は柱との付根で台輪の成だけ欠かれており、このために実肘木型の持送りをを用いて補強したと考えられる。

図14 住吉神社本殿連三斗下持送り

庇の実肘木型の持送りは極めて小さい部材であり、風食や虫害のため辛うじて実肘木型であることが分かる程度である。庇では頭貫のすぐ下に内法長押を打つため下段肘木の下に大きな持送りを入れるのは難しいが、おそらく身舎の意匠を参考にして庇にも用いたも

のであろう。三浦氏は山口県南部の中世社寺建築に用いられている実肘木や虹梁下などに用いられる実肘木型の持送りは成・幅ともに他の地域と比較して異様なほど断面の小さいものを用いていることを指摘している²⁴⁾。よって現本殿において連三斗の下に小さな持送りを入れることも山口県の地方色の一つといえることができる。また社寺建築における地方色は十四世紀後半頃から見られるものといわれており、山口県の場合は元応二年（1320）の功山寺仏殿の身舎で既に現れている²⁵⁾。このことからすれば前身本殿の頃から、小さい実肘木型の持送りが用いられていた可能性が指摘できる。

（三）神座側面の戸口

次に神座側面に設けられた戸口について述べる。現本殿では中央の第三殿は両側面に戸口を設け、第三殿以外は相の間方向に片方のみ戸口を設けている（図1）。方一間の相の間を用いて連棟とした形式で、神座側面に戸口を設けた例は管見ながら現本殿しか見当たらない。

ところで中世の流造本殿では身舎の側面に戸口を開いたものが現れており、古くは徳治三年（1308）の苗村神社西本殿など十四世紀のものにも用いられている。身舎側面に戸口が開かれた理由の一つとして、神と人が正面の扉を共用することを避けたことが挙げられる。御戸開きや献饌などの正式な祭祀では正面の扉を用い、神職が本殿へ参入する通路口として側面の戸口を用いたと思われる。山口県の神社本殿の多くが身舎側面に人が通るための戸口を設けられていることを考えれば、現本殿でも同様の目的で神座側面の戸口を設けたと推察できる。

土田氏はこの戸口の配置について、中央の第三殿のみ両側面に戸口が設けられ左右の相の間を専用的に利用していることから、第三殿が著しく優遇されていると述べている²⁶⁾。しかし文明十二年（1480）の飯尾宗祇の紀行文『筑紫道記』²⁷⁾に宗祇が当社の祭神の並びを記しており、これを見ると主祭神の住吉明神は西の第一殿に祀られ、第三殿は高良大明神である。この頃には現在の祭神の配置と同じであることから、天正六年の再建の時点で第三殿が主祭神の神座であった可能性は低く、第三殿が優遇される理由は見当たらない。

そこで戸口は神職が神座に参入するための通路口であるということ踏まえてその配置について考えてみると、第三殿については本殿の左右対称性を守るためには両側面を戸口とするしかない。第一殿と第五殿については身舎の外側に戸口を開くと、玉殿の安置された祭壇が直に外界に晒されてしまうために都合が悪い。よって第一殿と第五殿は内側すなわち相の間の方に向かって戸口を開くしかない。第二殿と第四殿についてはもし内側に戸口を開くと、第二殿の内側から第四殿の内側まで戸口が連続して並ぶことになる。このことを避けるために第二殿と第四殿は外側に戸口を開いたと考えられる。以上より戸口の配置は必然的に現状のようになったものであり、土田氏の述べるように特に第三殿を優遇させようとしたものとはいえない。なお前身本殿に神座側面の戸口が存在したかについては資料が不足しており明らかにすることはできない。

五、現本殿の建築的特質

（一）前身本殿の規模形式

現本殿の建築的特質について考察する前に、前身本殿の規模形式を考えてみたい。まず前身本殿の平面については前述したように庇

安造當時から九間一面であった。また「長門国一宮御神宝物調進送文案」に五柱の祭神に神宝を献納したことが記述されていることから、前身本殿も身舎の神座が五室あったであろう。そして「御簾日記」より推定できる前身本殿の身舎の神座正面柱間はおよそ一丈一尺五寸である。もし相の間の正面柱間が現状のまま（九尺一寸六分）と仮定すると、前身本殿の全長はおよそ九丈四尺（現本殿は七丈六尺八寸）となる。この大きさは切妻造系の本殿で現存最大の正面規模をもつ厳島神社本社本殿（広島県、およそ七丈八尺）を凌駕するものであり、また前述の通り内法高も現状の二倍ほどあったと考えられることから、前身本殿は現本殿より遙かに巨大かつ神社建築史上類例のない長大な本殿であった可能性が考えられる。

屋根形式についての記述はないが、九間一面という平面を考えれば入母屋造であった可能性は低く、現本殿と同様流造であったと考えられる。神座の上の千鳥破風については一切記述されておらず前身本殿の頃からあったのか不明である。なお前身本殿の庇の形式については次節で述べる。

（二）庇に関する考察

流造本来の庇の形式は上下賀茂神社本殿などに見られるもので、庇の内部に身舎廻縁から一間の木階を降ろし、庇の屋根を正面柱間全体に広げた形式である。この場合の庇は木階が雨に濡れないようにするためのもの、すなわち向拝であると同時に、木階下で人が拝礼や儀式を行うためのものであったと考えられる。その後鎌倉時代になると徳治三年の苗村神社西本殿の庇に代表されるような、身舎より少しだけ低く床を張り建具など周囲を覆って外陣²⁸⁾とした形式が生まれる。そこで現本殿の庇を見てみると、内部に木階を設け建具を入れず開放的に扱っていることから、上下賀茂神社本殿のような流造本殿本来の庇の形式に近いものように見える。しかしこの形式で庇に内法長押を打っているものは管見ながら他に例がなく、現本殿の庇の内法長押の使用について説明することが難しい。ここでは現本殿の特異な庇の意匠について考察を行い、内法長押の意義を明らかにしていく。

前掲の「御簾日記」ならびに「長門国一宮御神宝物調進送文案」によって、前身本殿の頃は庇正面に御簾が掛けられていたことが予想される。さらに現本殿で庇正面に現状では不必要ともいえる内法長押があることから、前身本殿の頃にも庇の正面に内法長押を掛けていたと思われる。また内法長押があり、御簾まで掛けられていたということは、前身本殿の頃は庇の正面に蓐などの建具が入っていたと予想できる²⁹⁾。そして正面が以上のような意匠であるのに側面を吹放ちとするのは普通考えられないので、側面にも内法長押あるいは鴨居を廻し建具等が用いられていたはずである。よって前身本殿は上下賀茂神社本殿のような流造本来の庇の形式を持つものではなく、鎌倉時代以降に各地に見られるようになった外陣付き流造本殿であったと考えられる。また平清水八幡宮本殿や今八幡宮本殿など現存する中世の山口県の流造本殿は全て建具などを用いた外陣付きであり、奥行き三間の一間社春日造である石城神社本殿や正面三間側面二間の入母屋造である古熊神社本殿も前面を外陣とした形式である。よって中世の山口県の神社本殿は内部を前後二室に分けて内陣と外陣を設けるのが主流であったということができる。

ここで注意すべき点は、「御簾日記」によると庇の内法長押に掛けられていた外御簾の方が、身舎扉内側に掛けられていた内御簾より

三尺五寸も長いことである。一般的な流造本殿の身舎廻縁の木階の高さは三尺から四尺ほどが多く、この寸法から考えると前身本殿では庇の内部に木階が設けられていた可能性が指摘できる。このことについて参考になるのが十四世紀後期頃の建築と考えられている三島神社本殿（愛媛県東温市）と応永三十四年の大山祇神社本殿である。三島神社本殿は上下賀茂神社本殿のような一般的な三間社流造本殿で、一方大山祇神社本殿は三間社外陣付き流造本殿で、庇内部に身舎に上がるための木階を設けた形式である。三浦氏は三島神社本殿の旧状を痕跡により復元し、その旧状は庇の両側面が現在のよう開放されておらず、板壁で閉鎖され片方に方引きの戸があったこと、正面は建具が入っていない開放的なものであったことを明らかにした³⁰⁾。そして両本殿の差異から、外陣付き流造本殿はまず廻縁と浜床から成る庇部分を板壁などで囲って外陣とし、次の段階で外陣の床の高さを苗村神社西本殿のように廻縁に近い高さ、または大山祇神社本殿のように浜床に近い高さで統一することでできたと推察している³¹⁾。

応安三年の住吉神社前身本殿は庇の内部に木階を設けているのに対し、中世の山口県の外陣付き流造本殿は全て外陣の床高を廻縁の近くに統一した形式である。上記の三浦氏による推察を参考にすれば前身本殿は三島神社本殿の旧姿のように外陣付き流造本殿の古い形式であり、その後、山口県の外陣付き流造本殿では外陣の床高を廻縁の近くに統一したものと考えられる。前身本殿と三島神社本殿は建築年代が近く、また両社ともに中央から遠く離れた場所に鎮座していることから外陣付き流造本殿の古い形式が残ったと思われる。

前述したように現本殿は前身本殿と比較して柱間寸法と内法高が大幅に縮小されている。おそらく天正再建時の毛利氏の財力の問題などがあって縮小せざるを得なかったと思われる。また本殿を縮小する際に庇の形式を改めたと考えられるが、庇正面の内法長押まで撤去してしまうと、この部分が外陣であることが分からなくなってしまう。よって現本殿の庇の内法長押は庇が外陣であることを示すために残されたものと考えられる。

六、おわりに

本稿は長門一宮住吉神社本殿の建築年代を再考し、その建築的特質について検討を加えたものである。応永三十三年の「御簾日記」に記されている御簾の大きさと現状の大きさが全く合わないことから、現本殿は応安造営の本殿を縮小して再建されたことは間違いなく、その再建時期については文献と本臺股の意匠から天正六年と推定した。

現本殿の建築的特質については、身舎の組物に平安時代末期には成立していた鯖の尾付き平三斗を用いているように、古式かつ独自の意匠を持っており、長門一宮の本殿としての格の高さを示すと同時に中央とは離れた長門国にあるために時代の好みに後れた意匠が見られることを指摘した。現本殿最大の特徴ともいえる庇の内法長押については、「御簾日記」ならびに「長門国一宮御神宝物調進送文案」によって前身本殿の頃は庇に御簾を掛けていたことが分かり、当初は庇が建具などを用いて外陣として扱われていた可能性が高く、現本殿の庇の内法長押はそのことを示すものであることを明らかにした。

今回住吉神社本殿について建築年代から検討し直すことで新たな

知見を得ることができた。本稿によって建築年代が二百年降ることとなってしまうが、現本殿は神社建築の発展を考えるうえで貴重な遺構といえ、その価値は依然として高いものと評価できる。また今までの神社本殿に関する研究では、その本殿に特徴的な構造や意匠があっても単なる特色として扱われ深く追及されることは少なかった。しかし現本殿において庇の内法長押が前身本殿の姿を示しているように、神社本殿の特徴的な意匠には多くの問題が潜んでいると思われる。今後はこのような点に着目し研究することも重要と考えられる。

注

- 1) 土田充義「住吉神社本殿」『日本建築史基礎資料集成』三、社殿Ⅲ、pp. 22～28、中央公論出版、1981. 8。
- 2) 稲垣榮三『神社と霊廟』原色日本の美術 16、小学館、1968. 10。
- 3) 錦織神社本殿の細部意匠を見ると、建築年代が下降する可能性が考えられる。
- 4) 『山口県史』史料編古代所収。「長門一宮神宮寺別当僧侶不可預神祇官移之由、上卿被難、掲史範定不准退帰」
- 5) 『長門国一ノ宮住吉神社史料』上巻所収。「於造営者、仮殿・正殿共以国衙役也、子細見所進文書絵図、爰正応遷幸之後、神殿破壊之間、文保年中日野大納言家国務之時、被作仮殿、嘉暦元年被遂遷宮畢、正殿事同為有沙汰、或自国方被経奏聞、或自武家雖被触眼代、于今未道行、且黒木之殿、白地之構、依送数年、既以神体神宝被侵雨露、御神条宜難測、早任先々目代等請文之旨、以国衙無正税被遂御造営敷、不然者、被寄別料足於社家、遂其節哉否、欲被経御沙汰（以下略）」
- 6) 『長門国一宮住吉神社史料』上巻所収。
- 7) 棟札が現存しており本殿の附指定となっている。
- 8) 『続群書類従』第四集、帝王部上所収。
- 9) 土田充義前掲論文（注 1 参照）。詳しくは後述する。
- 10) 『長門国一ノ宮住吉神社史料』上巻所収。
- 11) 『山口県史』史料編中世四所収。なお享禄三年（1530）にも大内義隆が同様の内容の宝物を献じている。
- 12) 造営尺が現行尺の 1 尺≒303mm より長く、305mm 程度であったと考えられ、計画寸法は八尺と考えられる。
- 13) 『長門国一ノ宮住吉神社史料』上巻所収。「一宮御造営檜皮事」
- 14) 『長門国一ノ宮住吉神社史料』上巻所収。「就一宮御造営檜皮事、条々御注進披露候了、一竹事、（中略）一竹釘事、（中略）一かきはい事」
- 15) 『長門国一ノ宮住吉神社史料』上巻所収。「長州一宮遷宮入目色々注文」
- 16) 『長門国一ノ宮住吉神社史料』上巻所収。
- 17) 『長門国一ノ宮住吉神社史料』上巻所収。「長門国一宮造営之事、宜被存別忠之敬神」

- 18) 『長門国一ノ宮住吉神社史料』下巻所収。
- 19) 『長門国一ノ宮住吉神社史料』上巻所収。「当社御遷宮、去月十日被遂其節之由候」
- 20) 土田充義前掲論文（注 1 参照）。
- 21) 正面両端以外は虹梁を大斗に組み込み、先端を鯖の尾として突出させる形式としている。正面両端で虹梁を大斗に組み込む形式を用いてしまうと、身舎内法長押と庇虹梁が交差することになって側面から見た納まりが難しくなるために、正面両端のみ形式を変えたものと考えられる。
- 22) 三浦正幸「神社」『新日本建築学大系』2、日本建築史、彰国社、pp. 248～258、1999. 10。
- 23) 三浦正幸「不動院金堂の研究二（山口より移建の根拠）」『日本建築学会大会学術講演梗概集』、pp. 2407～2408、1982. 10、同『不動院』、広島市教育委員会、1982. 3。
- 24) 三浦正幸前掲論文（注 23 参照）。
- 25) 三浦氏は前掲論文（注 23 参照）で功山寺仏殿の身舎に半分に割った挿斗が用いられていることを指摘している。なお功山寺仏殿の裳階は後世に大規模な修理が施された可能性が高く、身舎と裳階で細部意匠に大きな差が見られる。詳しい裳階の修理年代は資料の制約上明らかにできないが、裳階の海老虹梁ならびに木鼻の意匠から判断すれば十六世紀後期以降と考えられる。
- 26) 土田充義前掲論文（注 1 参照）。
- 27) 『群書類従』第十八集、日記部・紀行部所収。「住吉に明猷律師諸共に参れり、（中略）鎮座の御神は西の第一住吉明神、次八幡大菩薩、高良大明神、神功皇后、諏訪明神、以上五柱なり」
- 28) 研究者によっては前室とも呼ばれているが、ここでは本来の呼び方に従って外陣と呼ぶ。
- 29) この形式の類例として、天文十年（1541）の武田八幡神社本殿（山梨県）が挙げられる。この本殿は正面のみに内法長押を打ち、引き違いの建具を入れ、側面に板壁を入れた庇をもっている。また「長門国一宮御神宝物調進送文案」からは庇に九間連続して御簾が掛けられており、九間連続して蓐などの建具が入っていたことが予想される。これに対し「御簾日記」では相の間正面の庇に御簾が用いられていたのか判断できないものの、現存する外陣付きの流造本殿で、庇正面の建具を神座の前とそれ以外で変化させている例はないことから、応永三十三年の時点でも庇には九間連続して蓐などの建具が用いられていたと考えられる。
- 30) 庇正面には格子戸等の簡略な建具があった可能性はある。
- 31) 三浦正幸「三島神社本殿（愛媛県温泉郡川内町）」『日本建築学会中国・九州支部研究報告』第 8 号、pp. 289～292、1990. 3。

図版出典

- 図 1～5、11、12 『日本建築史基礎資料集成』三、社殿Ⅲ（前掲注 1 参照）所収
図 6～10 文化庁保存図
図 13、14 筆者撮影

（2012年12月 9 日原稿受理、2013年 4 月26日採用決定）